

プレ FD を通じた大学教員になるための意識の変化と能力の獲得

—京都大学文学研究科プレ FD プロジェクトを対象に—

田 中 一 孝

(京都大学高等教育研究開発推進センター)

畑 野 快

(大阪府立大学高等教育開発センター)

田 口 真 奈

(京都大学高等教育研究開発推進センター)

The Change of Consciousness and the Acquisition of Abilities to Become an Academic Through the Preparing Future Faculty Program: A Case Study on the Preparing Future Faculty Program at the Graduate School of Letters, Kyoto University

Ikko Tanaka

(Center for the Promotion of Excellence in Higher Education, Kyoto University)

Kai Hatano

(Development Center for Higher Education, Osaka Prefecture University)

Mana Taguchi

(Center for the Promotion of Excellence in Higher Education, Kyoto University)

Summary

In Japan, preparing future faculty (PFF) programs are offered mainly in graduate schools. Recently, they have become even more diverse, depending on their aims, the participants' educational/academic status (e.g. graduate students, unemployed Ph.D. holders, or postdoctorates), and the implementation period. Although the degree of PFF participant's satisfaction has been reported by some institutions offering such programs, the effects of PFF programs are not sufficiently verified. Through a PFF program, this study aims to investigate how PFF participants would change their consciousness about teaching, and what abilities and knowledge they would acquire.

The survey was conducted in the graduate school of letters, Kyoto University, exploiting a sample of 53 alumni enrolled as part-time lecturers in the PFF program. The researchers collected 149 descriptions from the sample. These descriptions offered evidence of change in participants' consciousness about teaching and the acquisition of teaching abilities. Using a categorical data analysis, the researchers established the first four categories: development of teaching abilities, acquisition of knowledge, increased in awareness as teachers, and improvement as researchers. Several other subcategories were also established in the study, showing that PFF programs affect not only on PFF participants' practical teaching skills, but also on their research abilities and the ability to cope with teaching-induced anxiety. Additionally, the researchers discovered that the subcategories indicating PFF participants acquire higher education-related knowledge are so elementary that they are expected to acquire such knowledge at the earliest stages. Unlike faculty development programs, PFF programs are not yet systemized and schematized, but they are often offered rather fragmentarily in many Japanese universities. The categories derived in this study will serve as a framework to reconstruct the existing PFF programs and to design a new one.

キーワード: プレ FD、PFF、FD、大学教員養成、プレ FD の効果検証

Keywords: pre-FD, preparing future faculty program, faculty development, evaluation of preparing future faculty program

1. 問題と目的

本研究の目的はプレ FD を修了した大学院生・オーバードクター (OD)・PD が、プログラムを通じてどのような意識の変容を被り、またどのような能力を獲得するかを、定性的に明らかにすることである。

わが国において、大学への進学率は年々伸長しており、2000 年代後半からはいわゆるユニバーサル段階に到達した。他方、知識基盤社会と呼ばれる産業社会構造の中で、大学には、知識の活用能力や創造性、生涯を通じて学び続ける基礎的能力を備え、多様化・複雑化する課題に対応できる人材を育成することが求められている (文部科学省, 2008)。こうした複雑な産業社会に対応する形で多様な大学生を育成するにはどうすればよいかは、学士課程教育の質の保証という文脈の中で、高等教育の喫緊の課題となっている (文部科学省, 2012)。そして教育に携わる大学教員は、アクティブラーニングなど自身がこれまで十分に訓練を受けてこなかった新しい方法で授業を行うことが求められ (大山・田口, 2013)、「多様化する学生に対して適切な教育指導を行うために」、「教授法に関する不断の研究を行うことが一層強く要請される」(文部科学省, 2008) 状況にある。

以上のような背景のもと、質の高い大学教員を育成するために、各大学では所属する大学教員に各種 FD プログラムを実施するが、一方で、大学初任教員は教育方法に関する不安が高く (田口ほか, 2006)、教育を行う上で十分な訓練を受けていないことが指摘されており (神藤, 2011)、より早期の段階で職能開発が行われることが期待されている。すなわち、優れた大学教員を育成するためには、大学院生・OD・PD に対して教育を行うために必要となる様々な能力を身につけさせることが重要とされており、そのための取り組みがプレ FD (プレ Faculty Development) と呼ばれている。

これまでわが国において、プレ FD は名古屋大学、広島大学、東北大学、北海道大学、筑波大学、東京大学、京都大学などを中心に実施されており、少しずつではあるが、年を経るごとに実施大学は増加し、プログラムの内容は拡充される傾向にある。それぞれのプログラムは、目的・目標、対象となる受講者、実施期間、コンテンツなどの点で異なり、多様な取り組みが実践されている (夏目, 2011; 境ほか, 2014)。

しかしながら、プレ FD の受講経験が具体的に受講者に対してどのような効果があったのか、という効果検証についての蓄積は十分であるとは言えない。なぜなら、プレ FD プログラムそのものがまだ開始間もない大学が多く、十分なデータの蓄積がないからである。したがってプレ FD には受講者が大学教員になるためにどのような効果が実際にあったのか、それを測る指標にも乏しいこともあり、明らかにはなっていない。より端的に言うと、プレ FD のプログラムが受講者のどのような意識の向上、どのような能力の獲得に寄与するのかが、明確にされてこなかったのである。また海外の先行研究については、米国においては Preparing Future Faculty (PFF) という名称で大学教員養成のプログラムを実施し、その成果について調査報告もなされているが、我が国のプレ FD とは文脈が異なることもあり、そのまま参考にするには難しい¹⁾。受講者の意識や能力の変化を明らかにすることができれば、今後さらにプレ FD を改善・再構成をするための端緒が開かれるのみならず、大学院生・OD・PD の大学教員になるためのキャリア形成プロセスを明らかにすることにもつながるだろう。

そこで、本研究は京都大学文学研究科プレ FD プロジェクトを受けた博士課程修了生 (オーバードクター; 以下 OD) を対象とした自由記述調査を行い、プレ FD の効果について定性的に明らかにすることを目的とする。京都大学文学研究科プレ FD プロジェクトの修了生を調査対象者とした理由は次の三つである。第一に、当該プロジェクトの参加者は OD に限られており、全員が大学教員になることを志望している。したがって彼ら・彼女らを対象とすることで大学教員になる上で必要な意識・能力を効果的に抽出することが可能であるからである。第二に、当該プロジェクトは 2009 年から現在まで実施されており、プロジェクトの効果検証を行う上でデータの蓄積が十分にあるからである。第三に、後述するように当該プロジェクトの受講者は、長期間に渡って大学教員になるための多様な訓練や教育を受ける必要があるため、その効果について様々な面から検証できると考えられるからである。

2. 研究方法

(1) 文学研究科プレ FD プロジェクトの概要

文学研究科プレ FD プロジェクトでは、まず学期始めに事前研修会が開催され、プログラムの趣旨および目的について説明と、授業デザインについての講義が行われる。授業は前期・後期各 15 回のリレー講義の形式で行われ、受講者は京都大学文学部の非常勤講師として主として研究室に所属する前の 1 回生、2 回生を対象とした入門的な講義を担当する。全ての授業は公開され、毎回の授業終了後には 20 分～60 分程度の授業検討会が開かれる。1 人の講師は 2 回から 5 回の授業を行い、毎回の授業ごとにはワークシートを用いて授業デザインを行い、これを他の講師に配布する。自分の担当する授業がない時には、他の授業と検討会に参加することが求められる。授業参観者と受講学生は気づいた事をリフレクションシートに記載し、ここでの記述は検討会の際に紹介される。また講義は全て録画され、受講者はビデオを視聴しながらワークシートを用い、自分の授業を振り返る。後期の授業が全て終了した段階で事後研修会を開催し、参加者はこれまでの教育活動を振り返るための課題や、様々な授業の実践方法について、グループディスカッションに取り組む。以上が文学研究科プレ FD プロジェクトの概要である (図 1)。

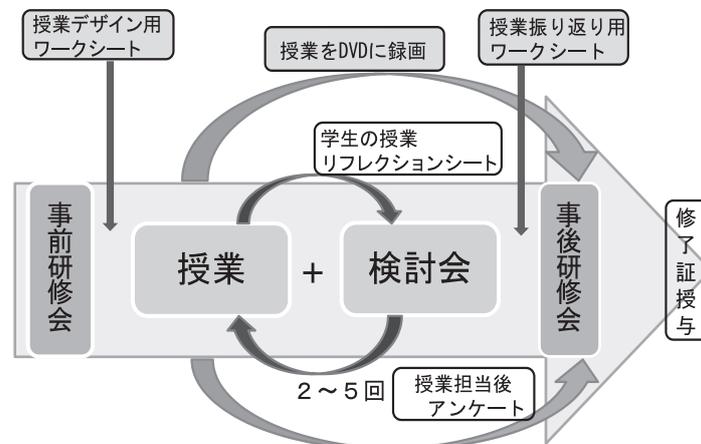


図 1 文学研究科プレ FD プロジェクトの概要 (田口ほか, 2010)

(2) 分析対象

調査対象者は京都大学文学研究科プレ FD プロジェクトに参加した OD 53 名であった。

2010～2013 年度のそれぞれの年度において、全てのプログラムが修了したあとに、教務補佐員を通じて調査票の配布、回収を行った。回答期間 1 週間であった。

調査は自由記述調査によって行われた。調査票では、本プログラムにおける「プログラム全体について」「リレー講義における講義」「授業後検討会」「事後研修会」、そして事後研修会における「グループ・全体ディスカッション」「ミニ講義」「ワークシートを用いた振り返り」について満足度とその理由について回答を求めている。その満足度の理由に、プログラムの効果についての多様な記述が見られたため、それらを分析した。

(3) 分析手法

プレ FD が大学院生・OD のファカルティになるためのどのような意識、能力の獲得を促すのかを明らかにするためにカテゴリー分析を行った。まず、自由記述調査で得られた記述から「～できるようになった」、「～の意識が高まった」、「～ということに気づいた」という記述を抽出した。次に、筆者らがそれらの記述を類似している点に沿って分類し、カテゴリー名を付けた。最後に得られたカテゴリーをその特徴によって上位・下位に分類した。

3. 結果と考察

以上のように、文学研究科プレ FD プロジェクトの受講者の意識の向上、能力の獲得を示す記述を抽出したところ 149 の記述が得られた。それらの記述を分析・分類し、最終的に得られたカテゴリー結果を表 1 に示す (表 1)。

得られたカテゴリの中で、最も上位に位置した第1カテゴリは「教育技術の向上」、「知識の獲得」、「教育者としての意識の向上」、「研究者としての成長」であった。この結果は、プレFDを通して大学院生・ODがこれらの意識や能力を獲得する可能性を示している。以下、4カテゴリの下位カテゴリや具体的な記述に着目しながら、受講生にどのような成長が見られたのかを確認していく。

表1 得られた記述およびカテゴリ

第1カテゴリ	第2カテゴリ	第3カテゴリ	第4カテゴリ
教育技術の向上	自分の長所短所がわかった	長所がわかった	
		自分の癖がわかった	
		改善点がわかった	
		他者からの評価を知った	
	授業デザインについてわかった	学生の学習を踏まえた授業デザインの重要性に気づいた	学生が考えていることがわかった
		授業の柔軟性の重要性に気づいた	京大生の特徴がわかった
	スキルアップできた	他者の工夫がわかった	
		様々な授業スタイルを知った	
	授業方法が改善した	他の授業を見ることで改善した	
		学生からの意見で改善した	
		他者からの意見で改善した	
	授業運営について考えた		
	客観的に見られた	自分では気づかなかった点を知ることができた	
参観で気づいた			
映像によってわかった			
知識の獲得	FDの意義がわかった	大学教育の動向を知ることができた	
	教育学的視点から見直せた		
	学生主体型の授業方法を知った		
教育者としての意識の向上	教育者としての目標が設定された	今後の改善に向けてのモチベーションが高まった	学生に役立つ授業をしたい
		教師としての自分の立ち位置の確認	色んな講義スタイルを試したい
			自分の講義スタイルを考えることができた
			教師として批判されることの重要性を実感
		他者の問題意識・考え方がわかった	
	今後の教師生活に自信を深めた		
	悩みの共有		
研究者としての成長	自分の研究を振り返ることができた		

(1) 教育技術の向上

「教育技術の向上」に分類された記述は80であり第1カテゴリの中でも最も多かった。このことは当該プログラムが「教育技術の向上」特に効果がある可能性を示している。文学研究科プレFDプロジェクトではODの授業実践と授業後検討会に多くの時間と労力が割かれていることから、授業実践に関わるスキルの獲得や、理解の深まりに記述が集中したことが推測される。

記述数の多さに伴い、第2カテゴリは6つ得られた。注目すべきは当該プログラムが授業実践に重きを置きなが

らも、必ずしも形式的な授業スキルの向上・獲得を意味する「スキルアップできた」に記述が集中しているわけではないことである。たとえば、「自分の長所短所がわかった」に属する記述として「自分の良い面に気づけた」「自分の授業に対する評価、他の講師の授業についての良い点、悪い点を考えることで、自分自身への批判的視点をもつことができた」「自分の授業の進め方で他人から見てどう見えているのかが、よくわかった」などがあるが、これらは深いリフレクションを伴いながら、自己の客観視や他の講師との相対化を通じて、自分の授業スタイルを改善し作り上げていこうとする記述である。また「授業デザインについてわかった」に属する記述として、「学生たちの反応、どこに関心を持っているか、動機づけ、説明方法の工夫など、自分が持っている問題点、改善点などを客観的に見ることができた」「学生がどのような姿勢で講義に臨んでいたのかを知ることができた」などが挙げられるが、これらは学生の学びのあり方を捉えた上で授業を改善する必要性を認識したものである。

以上のような記述・カテゴリーからは、教育技術の向上のためには、授業の実践自体やそれを遂行する諸スキルだけではなく、自己を相対化することや学生の特徴を理解することなど多面的な事柄が寄与していることがわかる。また教育技術の向上を効果的にするためには、それらを可視化するような有効な仕掛け（当該プロジェクトにおけるリフレクションシート、授業後検討会、DVD など）を、目的に応じてプレFDを導入する必要があることが示唆されている。

(2) 知識の獲得

「知識の獲得」に分類された記述は32あり、様々な次元において知識獲得が行われていることが明らかになった。たとえば、第2カテゴリーの「客観的に見られた」に属する記述、「学問的に比較的に近い分野にいる者同士が職階を超えて『講義のあり方・進め方』について忌憚のない意見交換ができた」「学生からのアンケートでは学びえない、授業の全体的デザインや、講義をするときの印象などを指摘することができた」などは、参観講師同士が会話によって様々な情報・知識を伝達し合っていることを示している。

また研修会において、当該プログラムのスタッフは、受講者に対して高等教育分野における基本的な講義を行っており、第2カテゴリーの「FDの意義がわかった」「教育学的視点から見直せた」「学生主体型の授業方法を知った」は、それらの講義から得られた知識についての記述から構成されている。それらに属する記述の中でも「大学教育に求められるのが、自分が受けてきた教育と大きく異なることを認識した」「高等教育の動向などのマクロな視点に関する知識をえることができた」などは、大学の教員を目指しながら、非常勤講師として実際に教壇に立つODたちが、高等教育についての基礎的な知識を欠いていることを示している。これは受講生たちがいわゆる一斉講義型の講義形態しか知らず、また研究に専念する一方でアクティブラーニングなど様々な教育手法や概念について学ぶ機会をこれまで持つことがなかったことが背景にあるだろう。受講生たちは博士課程を修了しており、また近い将来に大学教員になることが期待されていることに鑑みれば、この段階でのこの種の基礎知識の取得は、遅いと言わざるを得ない。次項で述べるように、受講生を取り巻く高等教育の動向は、そのような状況下で教員としてどう振る舞い、意識を醸成・向上させていくかということと密接に関わっている。したがって、より早期の段階で目的に沿ったプログラムを受講するような機会を大学院生に提供していくことが重要であろう。

以上の記述・カテゴリーは、受講者が知識を得るための機会を様々な形で設ける必要があるが、その際には受講者と獲得すべき知識の対応を考慮した上でプレFDをデザインすることの重要性を示唆していると言えるだろう。

(3) 教育者としての意識の向上

次に、「教育者としての意識の向上」に分類された記述は34であった。第2カテゴリーの「悩みの共有」には、「悩むところや困難を感じる点が、他の参加者も同じであることがわかった」「他の参加者と悩みや問題意識を共有できた」「自分が悩んだことはたいてい他の講師も悩むことがわかった」など講義を担当することで感じた困難に加え、「自分が悩むであろう問題を知ることができた」のように未経験の困難を予測し、それに備える意識が醸成されたことがわかる。同じく第2カテゴリーの「今後の教師生活に自身を深めた」ではさらに一歩進んで、教育者としての自己効力感が増し、「他大学で自分の研究について話をする際に役立つ経験を積めた」「他校で非常勤をするにあたって、FDの経験を活かそうと思った」「度胸がついた」などの記述が見られた。高等教育機関における初任者に対す

る不安調査では、初任者が主に教育方法に不安を抱いており、機関はそれに対し、研修などを通じて様々なサポートをする必要性が指摘されているが(田口ほか, 2006)、プレFDはそうした初任者研修に接続しうること、また初任者研修に先行する形で、将来大学教員になる者の教育に対する不安を軽減しうることを指摘できよう。

次に、第2カテゴリ「教育者としての目標が設定された」にはさらに第3カテゴリ「今後の改善に向けてのモチベーションが高まった」「教師としての自分の立ち位置の確認」などが続いている。具体的な記述を見ていくと、「自分の考え方、教授法をこれまで以上に意識できた」「小手先のテクニックだけでなく、講義を行ううえでの『姿勢』のようなものを学ぶことができた」といった教育者としての自己意識やスタイルを確立しつつ、「教師として批判されることの必要性を実感した」「今回の経験をふまえて今後学生の役にたつ授業をしていきたいと思うようになった」のように今後さらに教育改善に向かおうとする姿勢を見てとることができる。当該プログラムでは、ほぼ全ての受講者が一斉講義型の授業を実施しているが、事後研修会では主体的な学習についての講義とディスカッションが行われる。こうしたプログラムを背景に、「自分のものとは異なる講義スタイルを行ってみたいと思うようになった」という記述には、近年の高等教育の動向に適應する形で教育改善を進めていこうとする意識を見て取れる。

(4) 研究者としての成長

今回研究の対象とした文学研究科プレFDプロジェクトは、大学教員の活動のうちの教育に焦点を当てたものであるが、3つの記述から「研究者としての成長」のカテゴリが生成された。具体的に記述を見ると、「入門的な授業をすることで、自分の研究分野の基礎について振り返ることができた」とあるように、これまで専門研究に従事してきた博士課程修了者が、初学者向けの講義をすることを通じて、自らの研究分野を俯瞰的かつ総観的に捉え直すことができている。このことは「自分の研究内容を初学者に説明し、できればそれに興味をもってもらうというような授業をするために、自分の研究を整理する必要があるため、その点でも有意義だった」と述べられていることからわかる。

ODが授業実践をすることで成立する当該プログラムは、専門家の研究を初学者の教育へと橋渡しをする試みであると同時に、教育を通じて自らの研究を再構成するための貴重な機会であると言える。当該プログラムでは、講師に対して授業デザインのためのワークシートを通じて教授知識の構造化を促し、また授業後検討会においては、授業実践の形式的なスキルに限らず、専門的な授業内容についても参観者同士が自由に意見交換・議論することが認められている。講義という素材を通じて、受講者たちが教育者としてのみならず研究者としても成長することを、プレFDはその概念のうちに内包することが十分に可能であろう。

4. 今後の展開・課題

本研究の目的は、京都大学文学研究科プレFDプロジェクトを対象とし、プレFDプログラムを修了した大学院生・OD・PDが、プログラムを通じてどのような意識の変容を被り、またどのような能力を獲得するかを、定性的に明らかにすることであった。そのために、2010～2013年に文学研究科プレFDに参加したODを対象とした自由記述調査の結果を収集し、カテゴリ分析を行った。その結果、「教育技術の向上」、「知識の獲得」、「教育者としての意識の向上」、「研究者としての成長」の4つの大カテゴリが得られた。これらの結果から考えられる本研究の意義は以下の2点である。

第一にプレFDを通じて向上する意識と獲得する能力を多様な点で明らかにしたことにある。筆者らが最上位に位置づけた「教育技術の向上」「知識の獲得」「教育者としての意識の向上」「研究者としての成長」は包括的なカテゴリであり、授業改善に焦点を当てたプレFDにおいては、受講者の意識や能力の成長をほぼ全て包含していると思われる。だがその場合、受講者がより具体的にどのような点において成長を感じたのかを示す第2以下のカテゴリが重要になってくるのは言うまでもない。本研究では長期間に渡って非常に多くの内容を含んだプログラムを受講したODを研究の対象とし、また得られた記述も多種多様であったが、今回の結果が対象となった実践に特有なものであるのか、あるいはそうではないかを実践を変えながら確認する必要がある。

本研究の第二の意義は、教育に主眼を置いたプレFDが、形式的な教育技術に関するものだけではなく、研究者としての成長や、FDの意義の理解、教育者としての自己認識の確立など多岐に渡って効果があることを示したことで

ある。これまでに述べたように、受講者が獲得した知識の中には、高等教育の動向や様々な講義形態など、実際に授業を担当してからではなく、より早期に獲得することが望ましいものもあった。FDについては既にプログラムの整理と体系化がさまざまな目的に応じて進められており、研究の蓄積も進んでいる（佐藤ほか，2009）。他方、プレFDはそのような体系化は未だ十分ではない。だが本研究の結果からは、修士課程・博士課程・OD・PDどの段階で何を学ばせるのか、目的を設定した上でプレFDを展開して行く必要があると言えよう（田口ほか，2014）。その際にはもちろん、ミニマム・リクワイアメントを考慮する必要もあるだろう。

現在各大学は、ODのみならず、非常勤講師を全く担当したことのない大学院生、さらには学部生までも対象とし、様々な段階でプレFDを提供している。本研究で得られたカテゴリーは、プレFDを実施する際、受講者に具体的にどのような能力を獲得させ、どのような意識を向上させるか、各段階に合わせた目標を定める際の基本的な枠組みとなるだろう。

今後本研究をさらに発展させるためには、プレFDの受講者と未受講者を比較することが必要となる。なぜなら、今回得られた結果がプレFDによってもたらされたものなのか、それともプレFDは大学の非常勤講師など別の経験によって代替されるのか確認する必要があるからである。プレFDの受講者と未受講者との比較を通じて、プレFD特有の成果を明確化することが可能になると考えられる。

さらに、プレFDの予測的な効果を検証することも重要である。本研究では、プレFDによって受講者が悩みを共有し、今後教員として活動することに自信を深めることができたことが明らかになり、そしてこうしたプレFDの効果は大学初任者が抱える不安を予防軽減することにも繋がることを指摘した。加えて、プレFDが受講者の教育改善の意識を高めたこと、また他校での活動においてもプレFDでの経験を活かそうとする態度の醸成を促したことは、受講生が正規のファカルティになった後も、教育改善活動に積極的に関わることを予測させる。よってプレFDを経験した者は、実際に大学教員として十分な役割を果たすことができているのか、追跡調査によって確認する必要がある。こうした調査によってはじめて、大学教員になることに備えるというプレFDの本来の意義が明らかになると考えられる。

註

- 1) 我が国において、プレFDは、FDの延長線上で始まっており、主として教育（ときにカリキュラム改善）についてのプログラムが実施されることが多いが、教育能力の向上のみを目的にしているわけではない。これは米国におけるPFF事業も同様であるが、PFFは教育能力を育成するTeaching Assistant (TA) 制度の成果に積み重なる形で展開されるおり、研究、管理・運営、サービスなど教育以外の分野にも大きな比重が置かれて制度設計がされている（田口・松下，2013）。

大学院協議会（Council of Graduate Schools）とともにPFF事業を開始した米国カレッジ・大学協会（Association of American Colleges and Universities）は、PFFを評価・再構築するために、PFFプログラムがどのような点で価値があったかを受講者に対して量的調査を行い、その結果を報告書としてまとめている（DeNeef, 2002）。だがそこで調査されているのは、たとえば教育の観点で言えば、「教育の自己評価」「多様な生徒への教育」などわずか8点の項目の評価である。これには、先述のようにアメリカのPFFは、教育以外の様々な領域も重要視した事業であるため、たとえば給与やキャリアアップなど、多様な側面から調査する必要があり、相対的に教育面におけるPFFの価値の分析が薄くなるという事情がある。もっとも、DeNeefはインタビュー調査も行っており、量的調査では検討されなかった観点からもPFFの価値を論じているが、それぞれの内容については、量的調査の場合と同様の理由で概観的な議論にとどまっている。

参考文献

DeNeef, A. L. (2002), *The Preparing Future Faculty Program: What Difference does it Make?*, Association of American Colleges & Universities, Washington.

- 文部科学省 (2008) 「学士課程教育の構築に向けて (答申)」, http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1217067.htm (参照日 2014.7.31).
- 文部科学省 (2012) 「予測困難な時代において生涯学び続け, 主体的に考える力を育成する大学へ (答申)」, http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/siryu/1324511.htm (参照日 2014.7.31).
- 夏目達也 (2011) 「大学教育の質保証方策としての FD の可能性—FD の新たな展開の諸相—」, 『名古屋高等教育研究』, 11, pp. 133-152.
- 大山牧子・田口真奈 (2013) 「大学生におけるグループ学習の類型化: アクティブラーニング型授業のコースデザインへの示唆」, 『日本教育工学会論文誌』, 37-2, pp. 129-143.
- 境愛一郎・山口裕毅・張磊・久恒拓也 (2014) 「教職課程担当教員養成プログラムのめざすもの—プレ FD プログラムとしての独自性と課題—」, 『第 20 回大学教育研究フォーラム発表論文集』, pp. 186-187.
- 佐藤浩章・長澤多代・中島英博・稲永由紀・川島啓二 (2009) 「FD プログラムの体系化を目指した FD マップの開発」, 『大学教育学会誌』, pp. 136-144.
- 神藤貴昭 (2011) 『大学教育における相互行為の教育臨床心理学的研究: 「フレーム」とその変容に着目して』, 学術出版会.
- 田口真奈・出口康夫・赤嶺宏介・半澤礼之・松下佳代 (2010) 「未来のファカルティをどう育てるか—京都大学文学研究科プレ FD プロジェクトの試みを通じて—」, 『京都大学高等教育研究』, 16, pp. 91-111.
- 田口真奈・西森年寿・神藤貴昭・中村晃・中原淳 (2006) 「高等教育機関における初任者を対象とした FD の現状と課題」, 『日本教育工学会論文誌』, 30-1, pp. 19-28.
- 田口真奈・松下佳代 (2013) 「プレ FD とは何か」, 田口真奈・出口康夫・京都大学高等教育研究開発推進センター編著『未来の大学教員を育てる—京大文学部・プレ FD の挑戦』所収, 勁草書房, pp. 83-97.
- 田口真奈・田中一孝・畑野快 (2014) 「段階別にみたプレ FD の特徴とその目的」, 『高等教育学会第 17 回大会発表論文集』, pp. 148-149.